

中世ヨーロッパのキリスト教巡礼 —聖地と救済— Christian Pilgrimage in Medieval Europe: Sacred Sites and Salvation

山代宏道
Hiromichi YAMASHIRO

In Medieval Europe, people traveled for business, court appeals, military expeditions, and religious pilgrimages, and to acquire new knowledge. It is remarkable that military expeditions and religious pilgrimages took place side by side, especially when the sacred sites were located close to the heretic world.

In Christianity, the pilgrimage was regarded as a penitential act and imposed sometimes by church priests. This is because traveling to sacred sites meant that a pilgrim moved out of the community in which he lived and put his life in danger. What, then, was the reason for the pilgrimage? Was it for salvation? The salvation found at sacred sites and shrines meant a healing, or, in modern terms, the promise of salvation in the next world, as well as a feeling of security in this world.

As for the sacred sites, we can point out continuities of time and space. We notice that ancient Celtic sites for religious training in Nature became the sacred sites in Christianity. They had been places for meditation for hermits, anchorites, and ascetics. We also notice that there existed a kind of geographical network/continuity of worship of particular saints, for example, of St Michael the Archangel, the Virgin Mary, etc.

For the churches, monasteries, and hospices, sacred relics and miracles were very important because they attracted pilgrims, who contributed to a greater part of the economic revenue of each religious institution. Thus, the churches and abbeys tried to attract as many pilgrims as possible while providing them with various means to satisfy their needs for salvation physically and spiritually.

Additionally, the author proposed some points of comparison between Christian pilgrimages in Medieval Europe and the Shikoku pilgrimage in Japan.

はじめに

中世ヨーロッパの人が旅行した理由としては、商業や裁判・陳情活動、軍事的遠征、宗教的巡礼、知的旅行などがあった。キリスト教での巡礼は、基本的には悔い改めの行為であるが、それらには自分の意志によるものと、教会や司祭の指示によるものがあった。聖地への旅は、生活共同体の保護を離れ生命の危険に直面することを意味したのであり、旅の苦難による魂の純化をもたらすこともあって、現世における煉獄とみなすこともできるのではないか。

1 聖地

巡礼を論じる場合、人々はなぜ、どこに巡礼の旅をしたのかが問題になる。巡礼者は聖地をめざし、聖地にある「聖所」(shrine、聖なる場所、墓所)において神や聖人に対して願いがかなうように祈った。では、中世ヨーロッパにおいて、聖地とはどのような場所であり、聖地への巡礼で人々は何を求めていたのだろうか。北ウェールズの聖地 Holywell (神聖な泉)のように、古代ケルト時代、ついでキリスト教時代、そし

て現代でも巡礼者が多いのは、そこが宗派にかかわらず民衆信仰における聖地であり続けたからである。すなわち、聖地としての連続性が認められる場所である。そこでは「癒し」が与えられ、奇蹟が体験される。

このように聖地をめぐるには、まずはキリスト教聖地への巡礼を問題にすることができるが、同時に、キリスト教以前の聖地、さらに現在でも巡礼者が集まる聖地としての連続性に注目することが重要である。植島啓司氏が、聖地はわずか1センチたりとも場所を移動しない、聖地はきわめてシンプルな石組みをメルクマールとする、聖地は「もうひとつのネットワーク」を形成する、と述べていることは示唆的である。

1) 時間的連続性

中世ヨーロッパの聖地とは、たしかにキリスト教の聖地と言っても良いが、キリスト教以前からの聖地にキリスト教の教会堂が建てられている事例が多くあり、聖地としての連続性が認められるのである。古代ケルト信仰の対象であった泉や井戸が存在した場所にキリスト教の教会堂が建てられた事例が多くある。また、泉や井戸、巨石、岩山などといったケルトの隠者・隠修士・禁欲的苦行者のゆかりの場所がキリスト教聖地となっている。

紀元前500年頃にブリテン島に移動したケルト人たちは、多くの神々を崇拝していた。そうした神々はしばしば地方的であった。その後、キリスト教の伝道者たちは、異教的信仰を単に否定するのではなく、むしろ古い神話や神聖な場所を利用しながら新しい宗教に適応させていったのである。6世紀にブリテン島へのキリスト教布教をリードしたローマ教皇グレゴリー1世も、伝道修道士たちに対して古い崇拜場所にキリスト教の教会堂を建てるようにと指導している。

南イタリアの聖地モンテ＝サンタンジェロ（モンテ＝ガルガーノ）について、陣内秀信氏は次のような注目すべき指摘をしている。「古来、人間は洞窟や山頂に宗教的な雰囲気を感じ、そこにしばしば祠を設けてきた。聖ミカエル信仰は特にその傾向を強く示す。この大天使の信仰はしばしば、自然の洞窟の中に、山の頂上に、あるいは高く聳える場所に、時には川や泉の近くに、聖なる場所を求めた。まさにガルガーノのそのように、聖なる意味を強く感じさせる自然の舞台を選んだのである。聖ミカエルは、教会の敵と闘い、自然の力を鎮め、おさめる英雄として考えられていたという。キリスト教の時代になると、山や溪谷、洞窟、泉といった自然の中に聖なる意味を見出す価値観は薄れ、〈場所〉のもつ意味が失われたと思われるが、中世の早い時期には、人々の心の中にこうした感覚は綿々と生き続けていた。それがヨーロッパ文化の基層として今も受け継がれているといえよう。」このように、そこには聖地としての連続性が認められるのである。

古代の地中海周辺地域に見られた大地母神から中世ヨーロッパの聖母マリア信仰への連続性も見られるようである。12世紀頃になると、それまで救済が語られることが少なかった女性に対して目が向けられるようになった。すなわち、アダムを誘惑したイヴに連なっており、神のもとからの人類の追放に責任あるとして断罪されがちであった女性のために、人類を救うキリストをもたらした聖母マリアという捉え方が強調されてくる。母親と子供のキリスト、女性への関心の高まりであった。マリア信仰は、人々に親しみと救済への具体的手がかりを与えた。

イングランドでも、ウォルシンガムの聖母マリア修道院が、有名な巡礼地のひとつに発展していった。それは、1150年頃に在地の女領主 Richelde of Fervaques が建てたチャペルに起源をもつようである。そのチャペルは、マリアへの受胎告知があったナザレの修道院と建物の外観が似ていたといわれる。彼女の息子ジェフリーは、聖地エルサレムを訪れているが、チャペルに修道院を付け加えている。その後、修道院は巡礼の中心地となったが、教会堂の東側に「癒しの井戸」が存在していたことが注目される。古代ケルト的な信仰の対象としての泉の存在との連続性が示唆されているからである。

2) 空間的連続性

中世の聖地をめぐる空間的連続性という視点からは、聖地と聖地をつなぐネットワークが指摘できる。

中世ヨーロッパにおけるキリスト教会や修道院は学問と芸術の最前線基地であったが、それらの結びつきは国際的であった。初期のアイルランド系伝道修道士たちは、ブリテン島西部（コーンウォール半島、ウェールズ、スコットランド西部）、そしてアイルランド、さらにブルターニュの間を自由に移動していた。かれらの代表的聖人としては、Patrick（アイルランド）、Columba（スコットランド）、David（ウェールズ）、Piran（ブルターニュ）といったエネルギッシュな修道士たちがいた。かれらの死後、その教会はすぐに聖所となり、巡礼者たちがあらゆる困難を乗り越え旅してくるようになったのである。

ケルト系（アイルランド系）修道士たちの伝道活動によってアイルランド海を中心とした周辺地域の教会を結ぶネットワークが形成されていった。巡礼者たちは、いわば聖地を結ぶネットワーク上を移動していたと言えるのであろう。K. スグデンが指摘しているように、ケルト系伝道者たちに関わる巡礼の4つの聖地St Michael's Mount、Iona、St David's Cathedral、Lindisfarneがすべて海岸線に有ることは、ケルト系聖人たちが海を旅したということを示唆していて興味深い。

南イタリア・シチリア方面へのノルマン人移住は、1016年南イタリアのバリ北方の聖地モンテ＝サントアンジェロへ巡礼に行ったノルマン騎士たちが現地の有力者に傭兵として雇われたのが始まりであった。聖地モンテ＝サントアンジェロはバリ北方の半島にあり、8世紀以降、巡礼地となった。山辺規子氏は、近くの町の司教の前に大天使ミカエルが現われて、この地を自分とすべての天使に捧げよと命じ、その証拠として鉄の拍車を残していったという言い伝えを紹介している。

他方、世界遺産としても人気の高いフランス、ノルマンディーのモン＝サン＝ミシェル修道院の起源も8世紀にさかのぼる。時のアヴランシュ司教の前に、大天使ミカエルが姿をあらわし、モン＝トンプと呼ばれる岩場に自分のために礼拝堂を建てるように命じたという。このときに建てられた礼拝堂がモン＝サン＝ミシェル修道院の起源になった。以後、ノルマンディー公などの保護を受け、モン＝サン＝ミシェルは発展を遂げていく。特に大天使ミカエルが、戦いをつかさどる天使だということで、騎士たちの巡礼地として人気があった。

E. ヴァン＝ハウツは、大天使ミカエルとノルマン人との結びつきに注目しているが、山辺氏も、ノルマン人は、ほかの有名な巡礼地と並んで、みずから深く帰依していたノルマンディーのモン＝サン＝ミシエルの姉妹地とも言えるモンテ＝サントアンジェロを訪れるようになったと指摘している。ノルマン人の聖地モンテ＝サントアンジェロへの巡礼は、かれらとモン＝サン＝ミシェルとの関連から始まったのである。

モンテ＝サントアンジェロとモン＝サン＝ミシェルとの結びつきのような、大天使ミカエルをいただく聖地のネットワークが成立していたのである。このネットワークには、イングランド、コーンウォールのセント＝マイケルズ＝マウントやアイルランドのスケリグ＝マイケルも含めるべきであろう。

もうひとつの世界遺産であるイベリア半島（スペイン）のサンチャゴ＝デ＝コンポステラへの巡礼では、フランスからの4つのルート沿いに、出発点から教会堂や修道院をつなぎながら最終的な聖地へと向かうネットワークが形成されていた。ローカルなレベルでも聖地をつなぐネットワークが成立した。イングランドのカンタベリーへの巡礼路にある教会やチャペルのネットワーク。また、北ウェールズのホーリーウェルへの巡礼路などがある。

2 奇蹟と救済

巡礼者たちは、聖所において聖人や神に祈った。では、聖人たちに対しては、何を手がかりにして祈った

のであろうか。その点こそが、中世ヨーロッパの巡礼を考える際に注目すべきであるが、聖人たちの遺骸の一部、かれらに関連した物的遺物、すなわち聖遺物こそが、聖人たちにお祈りする際に欠かせない手がかりであった。

とりわけ聖地エルサレムへの十字軍遠征以後、東方から聖遺物が数多く流入した。その結果、ほとんどすべての主要な教会や修道院が聖遺物を保持するようになり、聖遺物の売買が行われる「マーケット」も存在していたようである。有名な聖所での聖遺物の数は、修道士や司教たちがより多くの巡礼者を引き付けようと競うようになるにつれて、ますます増加した。

中世ヨーロッパでは、スグデンによれば、人々が町の評判を判断するのに人口の規模や生産物ではなく、町にある聖遺物の数や評判に基づいて判断したと言われる。いくつかの聖地は、多数の聖人たちとの結びつきをもっていた。たとえば、グラストンベリー修道院では、アーサー王以外にも、13人の聖人と結びついていた。聖職者たちがどうして良いかわからないほどの聖遺物を所有していた聖所もあった。たとえば、カンタベリー大司教座教会では、400以上の聖遺物が簡条書にされていたという。

こうした状況は、いわば「聖遺物の氾濫」と言えるものであった。聖遺物が複製され、それはこっけいな程度にまで達した。

1) 聖人、聖遺物、パトロン

中世の奇蹟の証明は現在とはちがっている。渡辺昌美氏によると、たとえば、夢あるいは幻視に現われた聖人が、自分が相応しく埋葬されていないので丁重に埋葬し直してくれと告げる。翌日、その場所に行って掘ると骨が出てくる。まさにそれこそが聖人の骨であった。丁重に埋葬しなおすと、奇蹟が起き始めた。中世の人々にはこうした論理だけで十分であったのである。

聖人が修道士の夢に現れ、相応しい保管場所を求めた結果、他の宗教施設からの聖遺物の「盗み」が実行されることもあった。聖遺物がますます崇拜されるようになると、それらが産み出す富が盗みを引き起こしたともいえる。たとえば、1020年にひとりの巡礼者がアングロ＝サクソン期の尊者ベダの聖遺物を盗んでダラムへと持っていったが、それは、現在も依然としてダラム司教座教会に安置されている。

巡礼者を受け入れた側の教会や修道院、そして施療院にとって、巡礼からの経済的収入は無視できないものであった。巡礼者の増加は施与（ほどこし）や金品の奉納を増やし、それは経済的増収をもたらした。王や貴族たちは、聖所やホスピス（施療院）へ多額の金を基本財産として寄付した。また、一般巡礼者たちの寄付も、多くの教会堂や修道院を再建する助けとなった。中世ヨーロッパにおいて、教会や修道院がいろいろの聖遺物を収集保管することで、できるだけ多くの巡礼者たちを引き付けようとしたのもこうした事情があったからである。青山吉信氏が指摘するように、イングランドの最大の修道院のひとつグラストンベリー修道院は、新たな聖遺物の発見により巡礼者を誘致することで経済的困窮から脱出することができたのであった。

1102年ウェストミンスターで大司教アンセルムの下に開催された教会会議は、泉の崇拜を否認したが、さらなる禁止事項をつけ加えている。「何人も、司教の認可なく、泉、死体、あるいは他のものを神聖なものとして取り扱ってはならない。我々は、そうした事態が生じていることを知っている。」D. ウェブは、認可されない死んだ個人を崇拜することを禁じた箇所は、アングロ＝サクソン貴族であったワルセオブ伯崇拜に対する攻撃であったと考えている。同伯は、ノルマン王への反乱計画に加担したとして1076年ウィリアム1世によって処刑された。クローランド修道院に埋葬されたかれは、1092年教会堂へ移葬された。同時代の歴史家ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーは、ワルセオブの遺体が腐敗していなかったばかりか、切断された頭部が身体に再び結びつき、切断されたことを示す細い赤線のみが首に認められた奇蹟について語ってい

る。

イングランド人の目には、ワルセオフはノルマン人侵略者たちに対する無実の人であり、その処刑は政治的「殉教」であったということには疑問の余地がないのかもしれない。しかし、ワルセオフ崇拝については、こうしたイングランド側の立場のみが強調されるべきではない。なぜなら、そこにはノルマン人修道院長ジョフリー（Geffrey）による、地方的なアングロ＝サクソン人聖人崇拝の創出と、奇蹟によって巡礼者を誘致するという修道院全体としての動機を指摘することができるからである。

イングランド王ヘンリー2世の騎士たちによって殉教させられたカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、カンタベリーのみではなく、他所の聖人崇拝に対しても直接的影響を引き起こしていく。以後、イングランドのいかなる聖人（また、聖遺物保管者）も、このカンタベリーの新しい殉教者を無視することができなくなった。それは、寄進を求めての競争が起ることを意味し、他の古い聖人たちがいかに自分たちの名誉を維持するのかという問題を引き起こした。

1180年、聖フライデスワイドの聖遺物が新しい聖所へと移葬された。そして、奇蹟集が修道院長フィリップによって更新された。フライデスワイドの奇蹟集からは、多数の巡礼者が彼女のところに来るまえに、他の不特定の聖人達の聖所を訪ねてきていたことが分かる。彼女は、オックスフォード付近のイングランド中部地方からやって来た巡礼者、とくに女性たちのために病気治癒を行っている。聖トマスは、奇蹟集では特別に4回述べられている。ブルターニュ出身の騎士Hamoは、カンタベリーでは病気治癒がかなわず失望していたが、その後、親族訪問のためにオックスフォードへやって来て快癒されるという喜ばしい驚きを体験することになった。他の3人の巡礼者たちは、聖トマスにより、部分的に治癒されただけか、まったく治癒を得られなかった人々であった。しかしながら、トマスは、いつも最高の尊敬語をもって言及されている。なぜトマスが、かれらに恩恵を施すことができなかったのか、あるいは、それを望まなかったのかは説明されてはいない。しかし、考えられることは、その地方の人々が守護聖人としての聖フライデスワイドの方に絶対的な信頼を寄せていたにちがいないということである。

イングランドのノリッジにはそれまで近くのベリー＝セント＝エドムンド修道院の聖エドムンドに匹敵するような聖人がいなかった。こうした背景において、1144年ユダヤ人たちによって殺害されたとみなされた12才のキリスト教徒の少年ウィリアムの話が、1169年ころノリッジ司教座付属修道院の修道士 Thomas of Monmouth によって創作され喧伝されていく。ノリッジ司教座教会としては、ベリー＝セント＝エドムンド修道院のような著名な聖人が不可欠であった。1151年聖ウィリアムの遺骸の移葬後には幻視（幻想 visions）と奇蹟が起きた。トマスは、夢の中に先の司教ハーバート＝ロシंगाが現れ、以前は司教座教会の建設資金のために土地の寄進が必要であったが、今では聖遺物が収入をもたらしていると語ったと伝えている。しかし、聖ウィリアム崇拝は、短期間でその推進力を失っていく。ノリッジ司教座教会では、最初からウィリアムに関する疑問が存在していたようである。たしかに、聖ウィリアム崇拝の事例は戦略的には失敗したとしか言えないのであるが、しかし、一時的にはあれ、巡礼者たちの獲得と経済的利益をもたらすことにかなり成功したとみなすことができるのかもしれない。ノリッジ市民の間では、他の聖人への信仰対象の移行はあったかもしれないが、聖人ウィリアム崇拝における信仰心が衰退するといった事態が生じたわけではなかった。

2) 奇蹟と救済

1143年クリスマス前に、グラストンベリー修道院長であり、ウィンチェスター司教でもあったヘンリー＝オヴ＝ブローアがローマへと旅し、すぐにカンタベリー大司教セオボールドが続いた。両者とも、ローマ教皇インノセント2世の死に際して、新しい教皇から教皇使節に任命されることを求めていたからである。この

司教ヘンリーは、再度（1149-51年）ローマを訪問した帰途にウィンチェスターの司教館を飾るために、古代彫刻など多くの異教的な芸術品を購入して持ち帰ったと評判になった。かれはロマネスク芸術の最大のパトロンの1人であった。こうした司教や大司教たちのローマ訪問を、ただちに巡礼とみなすことはできないかもしれない。たしかに彼らの行動は、宗教的敬虔さからというより、教皇へ陳情するための訪問であり、むしろ世俗的動機による旅とみなされるべきかもしれない。しかし、一般の巡礼者たちについても、巡礼の宗教的動機と世俗的動機を区別することが容易でない場合も多いのである。

イングランドからもサンチャゴ＝デ＝コンポステラ巡礼へと出かけた人々がいた。国王ヘンリー1世がみずから設立したレディング修道院へと贈った聖ヤコブの手の聖遺物は、その修道院をイングランドにおける聖ヤコブ信仰の主要巡礼地として確立していった。その地位は、すでにサンチャゴ＝デ＝コンポステラへ2度も巡礼していたが願いがかなわなかったある男の息子をその聖遺物が治癒したことで強化されたという。

社会的に下層の人々も国内の巡礼地を訪れた可能性がある。カンタベリーやウォルシンガムへの贖罪や病氣治癒奇蹟を求めての巡礼がそうであった。下層の人々は、自国の地方的聖所を訪問することで満足しなければならなかったが、そうした場合でも、どの聖所に行くかの選択は広範であったにちがいない。多くの教会堂が地方的聖人たちによって建設されたし、そこには、奇蹟を起こすかれらの聖遺物が保存されていたからである。

かつて、聖地での修業は、隠修士（修行者）に自然の厳しさの中で自分たちを感覚的にコントロールすることで満足を与えたはずである。それと同様に、一般の巡礼者たちにとっても神秘体験や奇蹟体験は感覚的にも満足を与えたはずである。巡礼者たちは救済を求めて巡礼を行なった。そうした聖地や聖所における救済とは、「いやし」を意味していた。さらに、そうした救済とは来世での救いを約束されることで得られる現世における安心感であったと言えよう。

通常、人々は、宗教的理由で巡礼に出かけたが、時々には、世俗的動機による者もいた。巡礼者は、聖所において祈りながら、事業（冒険）やビジネス、恋愛や戦争における成功、あるいは、病氣治癒を願って聖人に対して直接に訴えたのである。

ノルマン騎士ウィリアム＝クリスピン（3世）は捕虜になったが、ベック修道院の聖母マリアに祈願した。神が自分を苦難から自由にしてくれた時にはエルサレムを訪れるであろうと約束した。まもなく獄から解放されたので、十字架を取った。それは、エルサレム行きの印であった。かれは巡礼の途中か出発前に死ぬことがあれば、ベックに埋葬してもらえるように神に願った。結局、かれは出発前に死に、約束どおりに埋葬されたが、それはマリアの執り成しのおかげであると言われた。

巡礼の動機としては、なによりも病氣治癒の願いが多かった。その際、ある聖所が特定の病氣治癒の奇蹟を起こしている場合には、聖遺物の主体である聖人の属性と関連があったようである。たとえば、727年死亡したオックスフォードの若い女性殉教者である聖フライデスワイドは若い女性の精神的疾患（ノイローゼ）を癒すことで評判であった。

ところで、聖地とは不思議な力（奇蹟）が働いている場所であり、そこでは巡礼者の間で病氣も感染しないと考えられていた点は興味深い。そこでは死を運命づけられていたライ病（ハンセン病）も感染しないとされた。また彼らを収容した病院でも奉仕する修道女たちは、彼らのうちにキリストを見ながら奉仕したと言われる。

3 巡礼の時代

中世ヨーロッパの巡礼では、聖地への軍事的遠征と宗教的巡礼とが結合していることがしばしば見られ

る。両者はともに肉体的苦行であり、命がけの行為であった。また、イスラム世界との境界近くにあった聖地への巡礼は、異教徒との戦いを引き起こした。この時期に、「キリストの戦士」という表現が用いられるが、それは文字どおり「武力による戦士」と共に「祈りによる戦士」、すなわち修道士を意味している。聖人崇拜や巡礼の振興（プロモーション）は、パトロン（世俗権力）によって行なわれたが、逆に、聖人との結びつきは世俗的支配者に加護を与え、その権威づけに役立った。

869年にデイン人（異教徒であるデンマークからのヴァイキング）によって殉教したイースト＝アングリア王エドムンド（在位c. 865-69）については、11世紀末の記録作者である大助祭ハーマン（Herman）が聖遺物に関する最初の控えめな報告をしている。915年ころに聖人の遺骸がベリーという町へと移葬され、遺骸を保管するための共同体が設置されることで、聖人崇拜は発展していった。しかし、病気治癒者としてのエドムンドの記録は11世紀を待たねばならない。カヌート王が即位し、1020年ベリーに修道院が設立されることで、単なるイースト＝アングリアの守護者としてではなくイングランドの全国的聖人としてエドムン崇拜が発展していったのである。一連の国王たち（カヌート、エドワード証聖王、ハロルド）は、かれに敬意を払い支援していった。そして、この時期から「大衆」巡礼と呼べるものが始まったようである。いろいろの場所から、多くの人々が自分たちの健康のためにその聖人を訪れるようになった。かれは、イングランドで王として最初の聖人となった。

おわりに 一日欧比較の可能性一

島国アイルランドにおける巡礼は、四国と同様に島国における巡礼としての特徴が見出せるのであろうか。守護聖人である聖パトリックと他の聖人たちとの関係は、弘法大師と他の聖（ひじり）たちとの関係に対比されるのであろうか。

アイルランド系修道士は布教活動や異郷遍歴活動を重視した。かれらの異郷遍歴活動と使徒的生活は巡礼と関連していた。朝倉文市氏によれば「ペレグリナティオとは、単なる冒険でも巡礼のために故郷を捨てることでもなく、自らの靈魂の救済のためにつねに新しい故郷を求めて彷徨い歩く贖罪的苦行の意味を伴った禁欲的動機にもとづく行為であった。」「キリストに導かれ、キリストに従って、キリストとともに歩む生き方であり、自己の愛着するものをすべて捨て断ち切ることを、したがって故郷を心身共に離れ、異郷へ巡礼者として赴くことである。」

四国遍路では戦国時代までの長期間、巡礼者のなかに修行者の存在を指摘できるようであるが、アイルランド出身のケルト系キリスト教伝道者たちの苛酷な遍歴活動との比較が可能なのではないか。

巡礼者が願った聖地における奇蹟はだれが起すと認識されていたのであろうか。弘法大師と仏陀・釈迦（いわゆる本尊）との関係では奇蹟（願いがかなうこと）はどのように捉えられているのか。弘法大師や聖たちに祈ることで、巡礼者はかれらが奇蹟を起したと考えがちである。そのことはキリスト教の神と聖人との関係に似ているが、聖人が奇蹟を起すとの考えが問題視されることはなかったのであろうか。

筆者は、日欧の11～13世紀は、上からの福音伝道（布教）と下からの救済願望が出会った時代と言えるのではないかと考えている。宗教的組織が整備されていき、司牧活動や説法が盛んとなったが、それに対応して一般信者たちの宗教教義や救済に関する覚醒と自覚が見られた時代であった。

また、武士や騎士の時代の開始は、戦乱や社会的不安を引き起こし、そのことが一般の人々の間で救済願望を増大させていった。

この時期はまた、自力から他力への移行の時期であったとも言えるのではないであろうか。もっとも、武士たちの間で禅のような自力修行が維持されたことを無視するわけではない。あくまで、それまでは布教や

伝道の対象になりにくかったが、しかし、社会的には重要な役割を果すようになった社会階層の人々、すなわち、商人、農民、漁民、さらに女性たちに対する救済理論が考え出されたということである。

自力の時代とは、奈良・平安期で、修行や苦行を行なう者の時代、すなわち富と時間があり、自分で寄進や修行を行なうことが可能な人々の時代であった。それはまた、国家的・貴族的（エリート）の宗教の時代であった。他力の時代とは、平安末期、鎌倉初期からで、一般庶民の宗教、あるいは民衆宗教の時代といえる。生業に忙しく、富や時間もなく専従念仏・唱名のみが可能な人々の時代が到来し、そうした時代になって、一般人による巡礼が行なわれるようになったのではないか。ただ、巡礼を念仏のような多数が実践できる行動とみなすのか、あるいは旅の危険をともなう命がけの修行とみなすのかは、意見の分かれるところかもしれない。

かつて聖地とは苦行の場所であり、自然の中で神的（神が宿る）場所であった。また、修行者、すなわち聖人ゆかりの場所である。そうした聖地は移動しない。なぜなら、修行者（聖人）は、自然のなかでそういった場所を選ぶからである。ついで、かれが生きたゆかりの場所が聖地とみなされていく。そこに宗教共同体（修道院）が設立され、巡礼者たちが集まってきた。

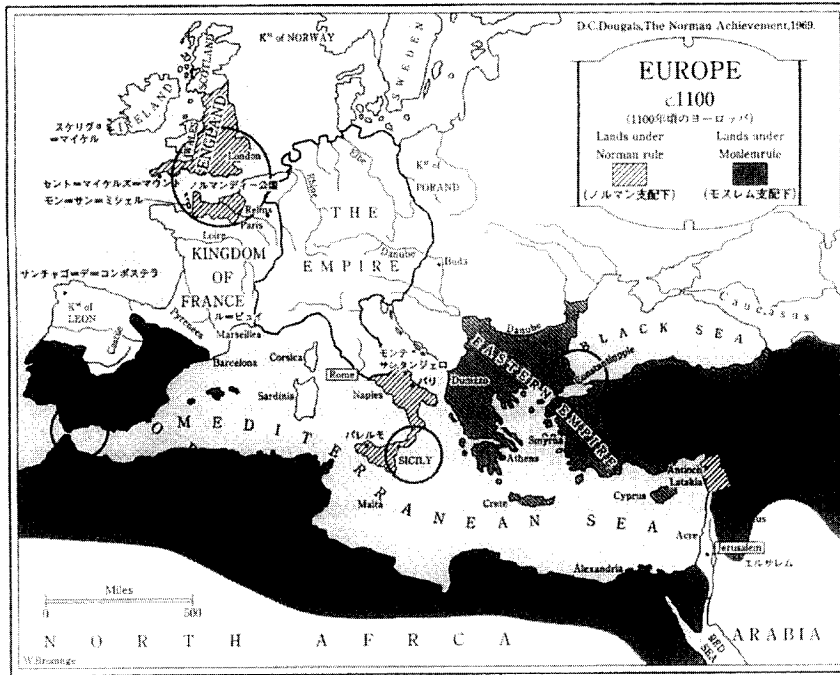
ところで、巡礼者たちは、現代にいたるまで、寺社組織による布教・宗教活動に応じる形で巡礼しているのか、あるいは、聖人のように個人的な使徒的活動（遍歴）による布教や説法に応じて、かれらの聖地や聖所を巡礼しているのだろうか。これは、だれが、何のために巡礼をプロモートしているのか、といった問題でもある。巡礼へのイニシアティブをだれが取っているのかは、重大な問題であろう。

現代では、多くの場合に短時間で目的地へ到達することが期待されているが、中世ヨーロッパの巡礼の旅では、目的地へ到達するまでの途中の宗教的体験が重視されていた。また、言い換えれば、中世の巡礼とは、現世の日常性から出発して聖地に赴き、目に見える具体的な聖遺物を手がかりにして、時空を超えた聖人や神に祈ることで奇蹟を招来し、それによって現世的な病氣治癒を得たり、あるいは、来世での救済を約束されることで現世での精神的安心感を得たような時空間移動の行為であったといえるのではないか。

（文献リスト）

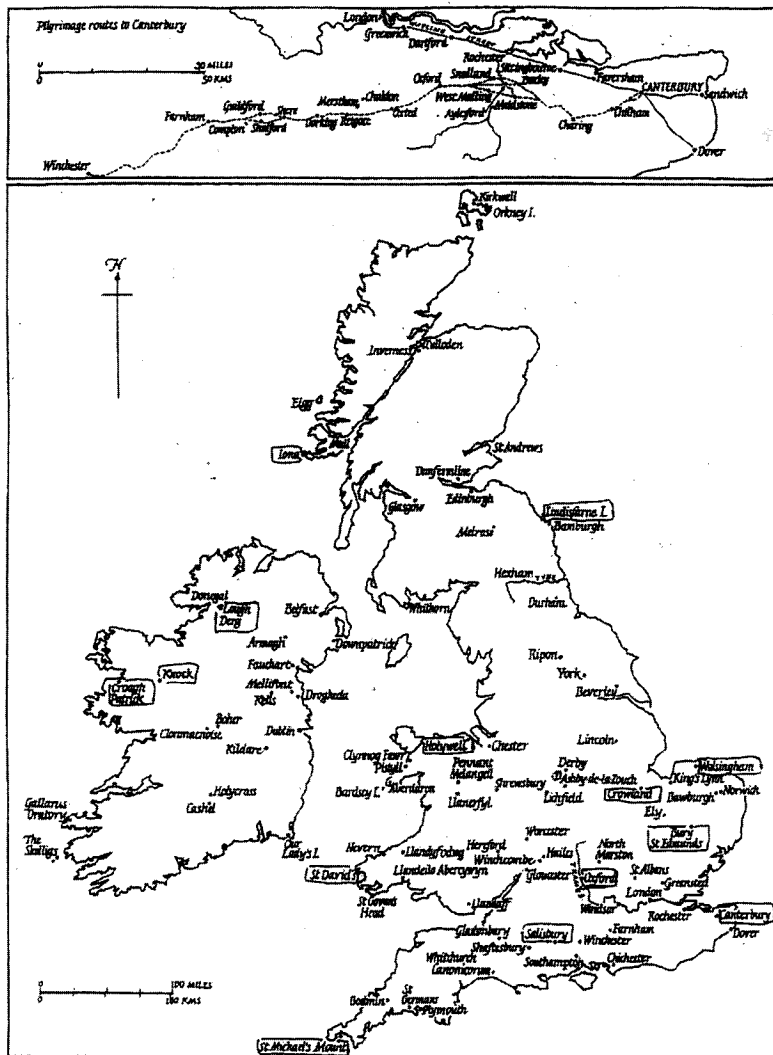
- F.Barlow, *The English Church 1066-1154*. London, 1979.
R.A.Brown, *The Normans*. Woodbridge, 1984.
M.Chibnall, *The Normans*. Oxford, 2000.
R.H.C.Davis, *The Normans and Their Myth*. London, 1976.
D.C.Douglas, *The Norman Achievement, 1050-1100*. London, 1969.
D.C.Douglas, *The Norman Fate 1100-1154*. Berkley, 1976.
D.C.Douglas, *William the Conqueror: The Norman Impact upon England*. Berkley, 1964.
B.Golding, *Conquest and Colonization: The Normans in Britain, 1066-1100*. London, 1994.
D.Greenway, trans., *Henry of Huntingdon, The History of the English People 1000-1154*. Oxford, 2002 (1996).
C.Harper-Bill & E.van Houts, eds., *A Companion to the Anglo-Norman World*. Woodbridge, 2002.
C.H.Haskins, *The Normans in European History*. New York, 1966 (1915).
H.Mayr-Harting, "Functions of a Twelfth-Century Shrine: The Miracles of St. Frideswide," in H. H.Mayr-Harting & R.I. Moore eds., *Studies in Medieval History Presented to R.H.C. Davis*. London, 1985. pp. 193-206.
A.Petzold, *Romanesque Art*. London, 1995.
N.Pevsner, *The Buildings of England: North-East Norfolk and Norwich*. Harmondsworth, Middlesex, 1970 (1962).
R.W.Southern, *The Making of the Middle Ages*. London, 1953.
K.Sugden, *Walking the Pilgrim Ways*. Newton Abbot, Devon, 1991.
J.Sumption, *Pilgrimage: An Image of Medieval Religion*. London, 2002 (1975).

- E.van Houts, trans., *The Normans in Europe*. Manchester, 2000.
- D.Webb, *Pilgrimage in Medieval England*. London, 2000.
- G.Zarniecki, "Henry of Blois as a Patron of Sculpture" in S.Macready & F.H.Thompson eds., *Art and Patronage in the English Romanesque*. London, 1986. pp. 159-172.
- 青山吉信『グラストンベリー修道院—歴史と伝説—』山川出版社、1992。
- 荒正人『ヴァイキング—世界史を変えた海の戦士—』中公新書、1968。
- 朝倉文市『修道院—禁欲と観想の中世—』講談社現代新書、1995。
- P・バレ、J・N・ギュッルガン、五十嵐訳『巡礼の道・星の道—コンポステラへ旅する人びと—』平凡社、1986。
- R.H.C. デーヴィス、柴田忠作訳『ノルマン人—その文明学的考察—』刀水書房、1981。
- C.H.ハスキンス、野口洋二訳『十二世紀ルネサンス』創文社、1985。
- 星野英紀『巡礼—聖と俗の現象学—』講談社現代新書、1981。
- 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス—西欧世界へのアラビア文明の影響—』岩波セミナーブックス、1993。
- 陣内秀信『南イタリアへ—地中海都市と文化の旅—』講談社現代新書、1999。
- R.マンセッリ、大橋喜之訳『西欧中世の民衆信仰—神秘の感受と異端—』八坂書房、2002。
- 関哲行『スペイン巡礼史—「地の果ての聖地」を辿る—』講談社現代新書、2006。
- 四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』法蔵館、2007。
- R.W.サザーン、森岡敬一郎・池上忠弘訳『中世の形成』みすず書房、1978。
- 高山博『中世地中海世界とシチリア王国』東京大学出版会、1993。
- 高山博『神秘の中世王国—ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化の十字路—』東京大学出版会、1995。
- 高山博『中世シチリア王国』講談社現代新書、1999。
- 田中明彦『新しい中世—相互依存深まる世界システム—』日経ビジネス人文庫、2003（1996）。
- 谷口幸男（文）・遠藤紀勝（写真）『ヴァイキングの世界』新潮社、1986。
- 植島啓司『聖地の想像力—なぜ人は聖地をめざすのか—』集英社新書、2000。
- 馬杉宗夫『大聖堂のコスモロジー—中世の聖なる空間を読む—』講談社現代新書、1992。
- J.ヴェルジュ、野口洋二訳『入門 十二世紀ルネサンス』創文社、2001。
- 渡辺昌美『巡礼の道—西ヨーロッパの歴史的景観—』中公新書、1980。
- 渡辺昌美『中世の奇蹟と幻想』岩波新書、1989。
- 山辺規子『ノルマン騎士の地中海興亡史』白水社、1996。
- 山代宏道「中世イングランドにおける修道院建設と地域支配（ヘゲモニー）」『西洋史学報』21（1993）pp. 1-18.
- 山代宏道『ノルマン征服と中世イングランド教会』1996、溪水社。
- 山代宏道「ノルマン征服と異文化接触」『中世ヨーロッパに見る異文化接触』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、地村彰之、四反田想。溪水社、2000）pp. 85-125.
- 山代宏道「バイユー—タペストリー—にみる文化的多元性」『中世ヨーロッパ文化における多元性』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、地村彰之、四反田想。溪水社、2002）pp. 7-44.
- 山代宏道「ノルマン征服をめぐる「危機」の諸相」山代宏道編『危機をめぐる歴史学—西洋史の事例研究—』（刀水書房、2002）pp. 209-227.
- 山代宏道「中世イングランドの多文化共生—「グローバリズム」と「ローカリズム」—」『中世ヨーロッパと多文化共生』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、地村彰之、四反田想。溪水社、2003）pp. 7-42.
- 山代宏道「中世ヨーロッパにおける巡礼の旅—時空間移動の視点から—」『広島大学大学院文学研究科論集』63号（2003）pp. 33-50.
- 山代宏道「中世ヨーロッパの旅—騎士と巡礼—」『中世ヨーロッパの時空間移動』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、中尾佳行、地村彰之、四反田想。溪水社、2004）pp. 7-45.
- 山代宏道「歴史のなかの人の移動—ノルマン移民とハワイ移民—」『地域アカデミー2005 公開講座報告書』（広島大学大学院文学研究科歴史文化学講座）2006年、pp. 31-45.
- 山代宏道「中世イングランドにおける生と死—聖人・治癒・救済—」『中世ヨーロッパにおける死と生』（共著者：水田英実、山代宏道、中尾佳行、地村彰之、四反田想、原野昇。溪水社、2006年）pp. 9-39.



1100年頃のヨーロッパの聖地

J. Adam, The Pilgrims' Way. London, 1978.



イングランド・アイルランドの巡礼地